

令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【新和小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	
思考・判断・表現	

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 計算や言語に関する事項など基礎・基本の定着が不十分である。 <指導上の課題> 児童の学習履歴を効果的に活用した個別支援や指導法等の設定が不十分である。	⇒ 授業や朝の時間に、計算や言語に関する基礎・基本となる事項について、「ドリルパーク」等で積極的に反復・習熟を行う。【全単元で実施】 小・中一貫教育の取組として行う中学校教員との授業実施において、国語科・算数科の指導を充実させるとともに、多面的な所見から学習履歴を確認し、個別最適な学びの手立てを講じる。【全単元で実施】
思考・判断・表現	<学習上の課題> 習得した知識・技能や資料を活用しながら、自己の考えをまとめる、的確な言葉で表現することが難しい。 <指導上の課題> 個人差が大きい。知的活動(論理や思考)やコミュニケーション、感性・情緒の基礎といった言語活動の場が十分に確保できていない。	⇒ 教科間の関連や学年を超えた系統的で意図的、計画的な言語活動が実施されるよう、カリキュラム・マネジメントを適正に行う。 ICTを効果的に活用し、協働的な学びによって自己の考えを表現することができるようにする。【毎時間】 授業において魅力ある導入や必要感のある課題設定、児童が解決の見通しをもって自力解決する場面の設定を行う【毎時間】。

⑤	評価(※)	学力向上策の実施状況
知識・技能		①結果分析(管理職・学年主任等) ②詳細分析(学年・教科担当) ③分析共有(児童生徒の実態把握) 職員会議・校内研修等
思考・判断・表現		

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)	
知識・技能	国語では、インタビューの様子からインタビューの気持ちを読み取ることができた。漢字や言葉の選択といった語彙に関する基礎的な学力に課題が見られた。算数では、基礎学力の定着が課題であり、全ての領域において正答を導き出すことに課題のある児童も見られる。特に数量をいくつ分ととらえることや数直線上に示された数をとらえることに課題が見られる。理科では、エネルギー、生命を柱とする領域において、既習事項を忘れてしまっていることが見られ、基礎学力定着が図られていないことが課題である。 またとして、単元の途中・終わりで既習の学びを再度押さえたり、朝学習の時間や家庭学習を活用したドリル学習の遂行等、学び方(自走)の習得と基礎的な学習の反復・習熟に努める。	
思考・判断・表現	国語の「C読むこと」に関する内容に課題が見られた。特に資料や話し合いの様子を読み取ること、読み取ったことをもとにまとめて書くことにおいて、課題が見られた。理由をまとめて書く問題の無回答率が多いことから、読むことにおける自分の考えをもち、表現する力が不十分であると考えられる。算数においても計算の仕方の求め方について、式や言葉を用いて記述する問題に課題が見られたことから、既習事項を活用して思考することが不十分であると考えられる。また各領域を複合的に読み取り考える力や数量の変化と関係に関する領域にも課題があり、数学的な考えの習得が必要である。理科では、問題を観察結果や実験結果から考察し、まとめる力に課題があり、理料的な思考の学びの充実が必要である。 手だてとして、「個別最適な学び」「協働的な学び」の授業づくりの充実には、国語では、自分の考えや感想をもちながら他者と考えを共有したり、相手や目的に合わせて伝え合う言語活動をしたり、条件に合わせて文章を書く言語活動等を重視したい。算数、理科においては、ICTを活用し、視覚的に捉えさせたり、話し合い活動、協働学習を充実させたりしながら習熟を図っていく。基礎的な学びについては、継続的な学びから定着を図る。	

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

- ①結果分析(管理職・学年主任等)
②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	
思考・判断・表現	

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	朝学習の時間や単元の途中・終わり等、「ドリルパーク」等を活用したり、基本的な計算等の反復・習熟に取り組みむことができた。 学習履歴において、授業の振り返りや単元の振り返り、ワーク等を活用しての達成状況を把握しながら、個に応じた指導や家庭との共有(個人面談)に生かすことができた。今後は、スクールカウンセラーを活用した学習履歴の充実にも努めたい。	なし
思考・判断・表現	B	児童が考えを深めることのできる時間(調べる時間・協働的な活動の時間)を授業の中で、その効果も鑑みながら意識的に増やした。その結果、児童が自信をもって考えを書いたり、発表したりすることができるようになった。 ICTの活用をさらに検討し、本校の実態に応じた、より効果的な授業展開を工夫していく必要がある。	なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)